県育成品種で躍進　長崎県のカーネーション生産

～計画的に、戦略的に、組織的に発展中の長崎カーネーションに注目～

真野恭平（農業総合試験場園芸研究部花き研究室
前・知多農林水産事務所農業改良普及課）

【平成２８年１１月２５日掲載】

【要約】

長崎県のカーネーション生産においては、県をあげた支援や特徴ある取組がなされ、経営安定に向けて様々な努力がなされている。県と生産者により品種を育成し、北海道とリレー出荷することにより、長崎県育成品種の周年出荷体制を実現している。また、栽培方法は県域のマニュアルで統一されており、共選組織における作付け品種の割り当てでは公平性を保つため栽培者が無作為に決定されている。長崎県では、高品質生産に向けて組織的に取り組んでおり、愛知県の産地が学ぶ点は多いと考える。

１　はじめに

愛知県のカーネーション出荷量は長野県に次いで全国第２位であるが、カーネーションの輸入割合の増加等の影響により、減少の一途をたどっている。長崎県のカーネーション出荷量は全国第６位であり、愛知県の４割以下ではあるが、長崎県では「長崎県花き100億達成計画（H18策定）」に基づく県をあげた支援やカーネーション産地の特徴ある取組により、生産者の経営安定に向けて様々な努力がなされている。

そこで、長崎県のカーネーション産地のうち、大規模経営の多い諫早市のＪＡながさき県央諫早カーネーション部会と標高の高い雲仙市の長崎高原カーネーション出荷組合において、県の支援内容や生産者の取組を視察したので紹介する。

２　長崎県のカーネーション戦略

（１）県育成品種の開発

愛知県と同様に長崎県でも、品種育成に力を入れている。県の農林技術開発センターが品種を育成し、生産者によって組織されている「育種クラブ」とともに系統選抜を行っており、現在「マシュマロ」、「こんぺいとう」、「ミルクセーキ」、「だいすき」（写真１）の４品種が種苗法に基づき登録されている。「だいすき」は最も新しく育成された品種で、今後の普及が期待されている。

写真１　長崎県育成品種「だいすき」

（２）県育成品種の周年出荷

国内産のカーネーションは、愛知県や長崎県の暖地の産地で秋から翌春まで、長野県や北海道の冷涼地の産地で春から秋まで、全国の花き市場へ出荷されている。こうした中で、ある品種が高い評価を得ても、単独の産地では出荷期間が限られてしまうため、

知名度が上がりにくいという問題があった。そこで、長崎県は北海道の産地に長崎県育成品種の生産をもちかけ､冷涼地が春から秋まで出荷するための試作を行うことにより、長崎県と北海道の連携による「こんぺいとう」､「だいすき」の周年出荷体制を整えた。これにより、市場における品種の知名度が上がり、価格も安定した。さらに、栽培時期が広がることで定植苗の購入機会が増え、苗生産を委託された種苗会社も効率良く生産ができるため、他の民間品種よりも単価を抑えることが可能になった。

３　栽培方法を県域で統一

長崎県は県域のカーネーション栽培技術を平準化するため、栽培マニュアルを作成している。マニュアルには、ハウスの種類別及びタイプ（スタンダードもしくはスプレー）別に、定植方法、整枝方法、肥培管理などが細かく記載されている。特に整枝については、時期ごとの採花枝の本数や採花位置まで細かく示されている。

写真２　ハウス内の様子（諫早市）

また、今回視察したＪＡながさき県央諫早カーネーション部会や長崎高原カーネーション出荷組合では、高品質生産のための細かい取り決めがある。例えば、①採花位置は、12月までは採花する枝の下部についた芽を残して収穫し（残した芽が２番花として春に収穫できる）、１月以降は切り花長を確保するために地際から採花する、②３月に整枝する際、「母の日」に確実に開花する芽だけを残し、開花が間に合わない芽は全て取り除く、といったことである。これらの取り決めを部会員全員で徹底するため、定期的に部会員で圃場をチェックし合い、品質の安定を図っていた。

写真３　諫早市の生産者

４　共選組織における作付け品種の割り当て方法

ＪＡながさき県央諫早カーネーション部会では、市場からの要請をふまえて品種選定と最低出荷量を決定していた。その作付け分担では驚くことに、栽培者を「くじ引き」で決定していた。共選出荷では、個人が品種を選んでいては、市場の需要に応えられない。そこで市場から要請される出荷量から品種ごとの栽培面積を算出し、その面積を全員に振り分けるという方法を採っており、生産者の公平性を保つため無作為に決定する。生産性の悪い品種を引き当てた生産者の収入が減らないように、品種ごとに設けた計算式から、部会の売り上げが公平に分配される仕組みとなっている。

視察先の生産者の中には「作りたくない品種を栽培しているときは、そのハウスには入

りたくないこともある」と苦笑いする方もみえた。しかし、部会全体の出荷量の確保や、産地の評価を高めるために、好みの品種でなくても一生懸命栽培しているとのことであった。不平不満を持たずに、長期的な視点で共選産地を発展させるための工夫であると感心した。

５　まとめ

　カーネーションの出荷量は、全国的に見ても最も多かった時期の半分程度まで減少している。このような中、長崎県のカーネーション生産においては、県をあげて計画的かつ戦略的に取組がなされていることがわかった。また、産地評価を高めることが重要と考える生産者が多く、高品質生産に向けて組織的に取り組んでいた。長崎県の高品質生産の取組から愛知県の産地が学ぶ点は多いと考える。

Copyright (C) 2016, Aichi Prefecture. All Rights Reserved.